

第66回青少年読書感想文コンクール

大阪府入賞 作品紹介 中学校の部 /大阪

■特選

◇本に救われる 泉佐野市立長南中3年 奥野美羽さん

私が読んだ本のタイトルは「居場所がほしい 不登校生だったボクの今」だ。このタイトルを見てから、読み始めるまでに長い時間はかからなかった。なぜなら、「居場所がほしい」と中学二年の一年間、毎日思っていたからだ。私自身不登校という経験をするのは無かったが、居場所を求めている、あの時の私ともう一度向き合うきっかけになればと思い、この本を読むことにした。

この本は、著者自身が不登校生となるきっかけや不登校時の体験、高校・大学での経験や今、そしてこれからの夢について語られている。約二百ページのこの本に、著者の今までの人生とこれからの希望が詰め込まれている。

この本の中で、中学二年の時の私が（今までの私が）悩みもがいた日々、感じた辛さが無駄ではなかったと思わせてくれる言葉があった。それは、「ツラさは、いつかチカラになる」という言葉だ。著者の経験があってこそ出た言葉だったからなのか、すごく説得力のある言葉だと感じた。この本に綴られている著者の絶望、そこから這い上がり。人との繋がりや経験。著者が感じる一つ一つの感情が私の過去に寄り添ってくれるような、そんな温かさを感じた。

当時の私は、自分が所謂「普通」ではなく、差別の対象にもなることに気づき、家にも学校にも、どこにも居場所を感じるができなくなり、人と関わるのが億劫になっていた。そんな毎日の中では、もちろん、自分の輝きを持つことはできなかった。そんな自分を何度も責めてきた。しかし、この本で「一人十色」という言葉に出会い、当時の自分を責めることは一切無くなった。一人十色とは、周りや本人が気付いていないだけで、実は眠っている素敵な一面があるのではないか。別の角度から光を当てたら、個性豊かな子、誰かの力になれる子かもしれない。という著者の考えだ。当時の私の場合、学校生活という角度では輝くことはできなかった。しかし、夏に、人権作品コンクールの作文部門で最優秀賞をとるという出来事があった。自分の想いを伝える場という角度では私は輝くことができたのだ。辛い日々を送っていると、ついついマイナスな面に目が行きがちだ。けれど、この出来事がきっかけで、自分のプラスな面にも目を向けることができた。この本に出会えたことで責め続けていた毎日に、光を当てることができたのだ。このように、その場所に合わないから悪いのではなく、どのような場所なら合うのか、輝くことができるのかを考えられれば、きっと一度失った自分への希望を取り戻すことができると私は思う。何かに辛さを感じたり、悩みを持つ人たちに手を差し伸べたりする時に重要視すべきことは、問題をどうすれば解決できるのかではなく、どれだけ気持ちに寄り添えるか、それをこの本が教えてくれた。この本では不登校を主に取り上げていたが、それ以外でも悩む人の周りには友人や家族、教師などそばにいればいるほど救いたい、力になりたい。そう思うだろう。しかし、その思いだけ

が一方通行となれば意味がなく、その想いも独りよがりになってしまう。想いの強さのあまりいつしかその人を色眼鏡で見てしまうこともあると思う。そうならないように、もう一度その人を知るために、その人自身を見て、その人自身と喋ることが大事なんだと気付いた。

「ツラさは、いつかチカラになる」先程出したこの言葉。当時から一年たった今では痛いほど分かる。今、学校は私にとって「成長を感じられる場所」となっている。一つの居場所となったのだ。過去の自分があったからこそ今成長を感じられている。過去の辛さから学ぶことも多かった。今の自分の糧となっている。現在悩みや辛さがなくなったかという、決してそうではない。ただ、今では悩みや辛さのある人生が幸せだと感じるのだ。それはきっとこの本に出会えて、今感じる辛さがいつか自分の力となる時が来ると知れたからだ。この本に一步を踏み出す勇気を未来への希望を与えて貰ったからだ。毎日自分の存在を問う日々が悪いものではなかった。自分に価値が無かったわけではない。この本がそう思わせてくれたのだ。不登校だけではなく、差別に苦しむ人、その他悩みや辛さを持つ全ての人に読んでもらいたい一冊だ。自分と向き合い、自分の可能性に気づくことができるだろう。一人一人全く違うのだ、比べる必要はないと、そう思える。一人一人輝ける場所は違うのだから。

この本は、私の思惑通り自分と向き合うきっかけになってくれた。そして、私はこの本で得た新たな考えや思い全てを行動に変え、色々なことに何度も挑戦し、壁にぶつかりたいと思った。あわよくば自分が何かを与える側になりたい。たくさんの人を救いたいとも。（「居場所がほしい 不登校生だったボクの今」浅見直輝／岩波書店）